

《京都》御所と離宮の栞

(おり)



其の九

— 京都御所 —

こうごうぐうつねごてん おこざしき
応挙が画いた皇后宮常御殿 御小座敷上の間小襖 「水に鮎」 「虹」



現在の京都御所は、寛政度内裏(1790年竣工、皇后の御殿はその後増築)の建物が嘉永7年(1854)の火災により焼失したため、安政2年(1855)に再建された建物が残っています。安政度に再建された皇后宮常御殿御小座敷上の間障壁画には、狩野永岳により「みほのうらはるのふじ三保の浦春の富士」(全16面)が画かれていますが、床の間脇違い棚の天袋と地袋は寛政度に、円山応挙が画いた小襖が残っています。天袋の「虹」は中央2面に渡り虹が画かれ、地袋の「水に鮎」は、鮎が川で泳いでいる様子が画かれています。

中国の写生画や西洋の遠近法を研究し、独自の画風を創出した応挙は、享保18年(1733)丹波国桑田郡(現在の京都府亀岡市)の農家丸山藤左衛門の次男として生まれ、石田幽汀に絵を学びました。江戸時代中期から後期にかけて活躍し、宝鏡寺(百々御所)など皇室にゆかりのある所へも出入りしました。

応挙は、寛政度御造営の際には御常御殿の一の間と御小座敷上の間も画っていますが、それらの障壁画は嘉永7年の火災により焼失してしまいます。しかし、この小襖は被害を免れました。現在は模写のものに入れ替え、現品は収蔵庫に保存されています。

因みに京都御所には、嘉永の火災で被害を免れた寛政内裏造営に制作された障壁画は、23作品(99面)残されています。



収蔵庫に保存している応挙作成の「水に鮎」

